

書名よりOPAC詳細結果に移動します。

※絶版のため図書館所蔵なし。

伊藤充子 先生

書名	著者名	出版者名
先生からのおすすめコメント		
1 モモ	ミヒヤエル・エンデ作/大島かおり訳	岩波書店
<p>大人が岩波少年文庫を読むなんてと思われるかもしれませんが、読み始めたら、どきどきわくわくしながら一気に読み進めてしまいました。作者がメルヘン・ロマンと名づけた美しく幻想的な童話で、表紙カバー、挿絵、カットすべてミヒヤエル・エンデ自身の筆によるものです。不思議な力、素直な心を持った女の子の物語です。モモは、解ける人がほとんどいない、とてもむずかしいなぞなぞを解き明かします。はるかかなたからひそかに聞こえてくる音楽を聴き分け、見たこともない美しい花を見ます。そして勇気を持って困難に立ち向かっていきます。時間との戦いのような現代に生きている私たちに、モモは時の大切さも教えてくれます。おとぎ話と言ってしまうえばそれまでですが、おとなになって忘れてしまった幼いころの思い出、子どもたちが持っている純粋な気持ちや感動する心をもう一度思い出してみませんか？</p>		

稲木真司 先生

書名	著者名	出版者名
先生からのおすすめコメント		
1 侍	遠藤周作著	新潮社
<p>高校生の時に初めて読み、かなり衝撃を受けたのを覚えている。ストーリーは実話がもとになったフィクションであるが、東北の田舎侍が支倉常長のお供としてヨーロッパに行き、果てはローマ法王に謁見する。武士道の中での生まれ育ったこの田舎侍はキリスト教を拒否しようとすればするほど意識し、いつの間にか信じるようになっていた。大人になって改めて読み直す機会があったが、新たな発見と感動があった。ストーリーにも感動したが、この田舎侍の心境を鮮明にまた自然に描写する遠藤周作の表現力にも感銘を受けた。自分の存在や信念、信条についてあまり深く考えたことのない現代の若い人たちへ薦めたい名著である。</p>		

小椋郁夫 先生

書名	著者名	出版者名
先生からのおすすめコメント		
1 自然の観察, 復刊	文部省著/日置光久 [ほか] 編集・解説	農山漁村文化協会
<p>戦後作成された我が国最初の学習指導要領の作成過程に関わった昭和16年に出版された国民学校の教師用書。子どもの関心や感性を大切に、子どもが自然に親しむ中でどのような観察を行い、科学的に考える力の育成を図っていくかについて、多くの事例が紹介されている。</p>		

2	自由と規律: イギリスの学校生活	池田潔著	岩波書店
<p>1949年に第1刷発行から今日まで100刷以上発行されている名著。40年ほど前、文部省の先生から、ゆとりの教育の中の自由を考えるうえで是非!と紹介していただいた。一昨年、ある教育長からも同様の内容で紹介された。ここにこの本の素晴らしさを感じる。本の紹介には、「ケンブリッジ、オックスフォードの両大学は英国型紳士修業と結びついて世界的に有名だが、あまり知られていないその前過程のパブリック・スクールこそ、イギリス人の性格形成に基本的な重要性をもっている。若き日をそこに学んだ筆者は、自由の精神が厳格な規律の中で見事に育まれてゆく教育システムを、体験を通して興味深く描く。」とある。筆者はこの著の「その生活」の最後に「彼等は、自由は規律をとめない、そして、自由を保障するものが勇気であることを知るのである。」と述べている。また、「スポーツマンシップということ」では、スポーツマンシップとは、「彼等の立場を比べて、何かの事情によって得た、不当に有利な立場を利用して勝負することを拒否する精神、すなわち対等の条件でのみ勝負に臨む心掛けをいうのであろう。」と。いつの時代にも教育について考えるうえで貴重な存在の本であろう。</p>			

勝田拓真 先生

	書名	著者名	出版者名
先生からのおすすめコメント			
1	しろばんば	井上靖著	新潮社
<p>著者自身の少年時代を描いた自伝的小説です。主人公の洪作が5歳の時から両親のもとを離れ、曾祖父の妾であったおぬい婆さんと土蔵で暮らしている日々の様子から、懐かしさ、優しさ、素朴さ、おおらかさ、物悲しさなど様々な感情があふれ出てくる魅力的なストーリーです。伊豆湯島の自然の中で、幼い子どもが成長していく描写に心を打たれる場面が随所にあります。保育者・教育者を目指す皆さんには、ぜひとも読んでほしいと思います。</p> <p>私が、この作品を初めて読んだのは40年以上も前のことですが、その後も読むたびに新しい発見と感動を与えてくれます。また、江戸時代から続く豊橋の老舗和菓子屋のお菓子が登場し、「説明出来ないほどのおいしさ」と綴られています。私は豊橋に行った際には、このお菓子を買って帰ることにしています。当時の『しろばんば』の世界に浸ることができ、とても幸せな気持ちになります。自分自身を振り返ることもできる内容で、読み出すといつの間にか引き込まれています。続編の『夏草冬濤』、『北の海』もお薦めです。</p>			

門松愛 先生

	書名	著者名	出版者名
先生からのおすすめコメント			
1	おんなのことは	茨木のり子詩	童話屋
<p>—自分をカづけてくれる言葉が欲しい、と思ったことはありませんか。共感できる言葉が読みたいと思ったことはあるでしょうか。そんなときにおすすめするのが、「わたしが一番きれいだったとき」で言わずと知れた、茨木のり子の詩集です。</p> <p>私が茨木のり子に初めて出会った記憶は、高校の授業でのことでした。そのときは、深く感銘を受けたわけでもなく、詩とはこういうものなのかという感想を抱いたのみだったかもしれません。しかし、大学生になり、新たな生活のなかで一人暮らしをはじめ、一人思い悩んだり、苦しい経験も味わうなかで改めて読み直してみると、深く共感できる、ときめきを覚えるような言葉があふれていることに気づきました。</p> <p>何だかわからないけど心細い時、綺麗な言葉に触れたい時、力強い言葉に触れたい時、ときめく言葉に出会いたい時、だまされたと思って開いてみてください。あなたの求めている言葉がきっとそこにあります。</p>			
2	子どもたちの階級闘争:ブローケン・ブリテンの無料託児所から	ブレイディみかこ著	みすず書房
<p>イギリスの「底辺託児所」で保育者をしてきた著者によるユーモラスなドキュメント。5ページずつほどの短編なので読みやすいです。貧しい子ども、移民の子ども、複雑な家庭背景をもつ子ども、あなたなら、このように様々な背景をもつ子どもに対して、または保護者に対して、どのような保育ができるでしょうか。または、その実情についてどのくらい想像ができるでしょうか。本書では、イギリスで日常的に起こっているであろう貧困、偏見、差別の煽りを受けた保育士や子ども、保護者が多く登場します。また、著者が述べているように、政策によって保育現場がこれほど(悪い方に)変わるのかということにも驚きを覚えます。一方で、ともすれば暗くなりがちなのこれらのテーマが著者の独自の見方でユーモラスに記され、子どものかわいらしさやたくましさはどの国でも共通することだと感じることもできます。保育者でもある著者自身の目を通して、これらの実情を知ること、保育者や教育者は世の中にある様々な価値観と闘いながら生きていく仕事なのだと感じました。柔軟な価値観には幅広い知識が不可欠です。実情を想像する力を育むためにも、ぜひ読んでほしい一冊です。</p>			

榊原剛 先生

書名	著者名	出版者名
先生からのおすすめコメント		
1 閉鎖病棟	帚木蓬生著	新潮社
<p>精神科病棟を舞台にした群像ドラマ。2001年に「いのちの海 Closed Ward」の表題で映画化もされました。著者の帚木蓬生氏には、強制連行の実態と日韓の歴史に翻弄された人生を描く「三たびの海峡」や、ナチスへの義憤と日本の軍部の定見の無さを衝く「ヒトラーの防具」など、超一級品のミステリ(サスペンス)がありますが、氏は現役の精神科医で、生殖医療の底知れぬ闇を浮かび上がらせる「エンブリオ」や、臓器移植をテーマに医学の狂気と人間の心に潜む闇を描いた「臓器農場」など、医療ミステリにも佳作が多数あります。「閉鎖病棟」もそのひとつで、1995年の山本周五郎賞受賞作です。</p> <p>とある精神科病棟。それぞれ重い過去を引きずり、家族や世間から疎まれ遠ざけられながらも明るく生きようとする患者たちを、現役精神科医ならではのヒューマニティ溢れた語り口で綴ります。その日常を破ったある殺人事件。殺人を犯した者、それを知っていた者、彼らが守ろうとしたものはいったい何だったのか。淡々と、それでいて力強く『人間』を描く著者の優しさに心打たれます。感涙を誘う結末が、絶賛を浴びました。</p>		

佐々木基裕 先生

書名	著者名	出版者名
先生からのおすすめコメント		
1 説教したがる男たち	レベッカ・ソルニット著/ ハーン小路恭子訳	左右社
<p>2018年に読んだ本の中で、もっとも考えさせられました。後にネット上で「マンスプレイニング」という流行語を生むことになった著作の翻訳です。</p> <p>みなさんの周りに、聞いてもない説明や説教を上から目線でしてくる男性はいませんか。自分がいくつであって、「ものを知らない娘」扱いを受けた経験はありませんか。それを上手に受け流すことが女性の「愛嬌」だなんていう風潮はありませんか。そうした日常・個別的な女性「あるある」を出発点として、その根底にある他者をコントロールすることへの欲望へと議論が展開されています。</p> <p>自身の経験を振り返ってみると、確かに「マンスプレイニング」したがるおじさんは多かったように思います。また中年に差し掛かろうとしている同世代も、自戒を込めて言えば私自身も含めて、いつしか「マンスプレイニング」野郎へと変身しかけている気がします。反省させられました。</p> <p>しかし同時に反撃したくもなりました。「マンスプレイニング」と同様の感覚を、「共感ハラスメント」とでも言いたくなるような場面を男性としてしばしば経験しているからです。『共感させたがる女たち』というタイトルの本があれば読んでみたいと思います。</p>		

柴田悦子 先生

書名	著者名	出版者名
先生からのおすすめコメント		
1 西の魔女が死んだ	梨木香歩著	新潮社
<p>中学生になり、学校に通えなくなったまいが、おばあちゃんの家で過ごした様子、出来事が情景豊かに綴られています。祖母がまいに投げかける言葉の一言一言は愛情に満ち溢れ、学校にいけないまいを肯定的に受け止め、一人の人として接しています。また、いけなことはしっかり叱るなど、人として何を大切にしないといけないかが書かれています。自分の今までを見直したり考えたりできる本であり、是非、手元に置き、学生時代、母親になったとき、そしておばあちゃんになったときに読んでほしいと思います。</p> <p>私は見ていないのですが、映画化もされたようです。私は何年か前に大学生になった娘から勧められ読みましたが、今では二人の大切な本になっています。</p>		

渋谷寿 先生

	書名	著者名	出版者名
	先生からのおすすめコメント		
1	精神科学の立場から見た子供の教育	ルドルフ・シュタイナー著/ 大西そよ子訳	みくに出版
	<p>この本は、ルドルフ・シュタイナーの書いた本の復刻版である。私は1980年発行のものを持っているので、35年も前の、言わば古典である。私は現在、子どもの遊びや玩具を研究しているが、その最も根底にある哲学的基盤とした原点とも言える書である。シュタイナーの著書は、彼の人智学という神秘学的人間論に基づいている故に難解なものも多く、ともすれば誤解が生じやすい部分はある。しかし、この本は、幼児の成長の本質を、いわゆる目に見える部分としての自然科学的な認識だけでなく、目に見えない部分を含めて理解しようとする立場で書かれている。よって、耳慣れない単語や聞き慣れない用語という小さな壁を乗り越えて心で読み解くことで、幼児の行動や大人の幼児への関わりの、教育としての本質的なあり方を感じ取ることができる。</p> <p>この本は、シュタイナー自身の著作の中では最も読みやすく、幼児に最初に与えるべきお人形の、具体的記述もある。市販の可愛い人形を与えるのではなく、自然素材の古ナプキンで人形をつくり、顔はインキで眼、鼻、口を描いたものこそが、幼児が生命ある存在を感じ、想像力から健全な脳を形成するという論考に異議を挟む必要は無いであろう。先入観をなくして読み感じてほしい書である。</p>		
2	フィンランドで見つけた「学びのデザイン」：豊かな人生をかたちに する19の実践	大橋香奈, 大橋裕太郎	フィルムアート社
	<p>フィンランドは、自然が美しい北欧の国の一つですが、最近特に、子どもたちの学力の高さが話題に上ります。OECD（経済協力開発機構）によるPISA（生徒の学習到達度調査）は、毎回世界のトップレベルであることから、その要因が研究され多くの出版物も出ています。しかし本書は2人の著者により、調査やインタビューを通して、フィンランドにおける学びの実践が紹介されており、学校教育と学びはどうあるべきかという視点にヒントを与える、少し異質な「学びを考える」内容になっています。</p> <p>「学びのデザイン」というタイトルもやや変わっています。デザインとは、目的を持って実用的に形を考え、立案、計画、設計をすることと解釈するなら、本書で、デザイン先進国のフィンランドにおける、様々な視点による、学びに関する新たな課題や問題解決策を具体化するという、次のような学びのデザインの実践と成果を見ることができます。</p> <p>1. ミュージアムと「学び」、2. 図書館と「学び」、3. メディアと「学び」、4. 自然と「学び」、5. 人生と「学び」。これらを読み解くと、人間が豊かに生きていく上での生涯学習にもつながり、真の子どもたちの学力にも結びつく学校外教育について、フィンランドでは、いかに多様で大きく深い視野のもとで「学び」が仕掛けられているか理解できると思います。そして、「教育」と「学び」との関係をじっくり考えてみてほしいと思います。</p>		
3	人間の関係	五木寛之著	ポプラ社
	<p>今、教育の世界が大きく変わろうとしている。質も量も求められ、先生という職業もなかなか大変な時代になってきた。教育者を目指し、社会に出てプロになるということは子供や同僚、家族など様々な人間関係の中で生きて行くことになる。五木は、変わる時代に変わらないものを考える上で、「人間」を考えるより「人間関係」を考える方が重要だと説く。私は若い頃、人間を考える上で、1912年にノーベル生理学賞を受賞したアレキシスカレル著「人間この未知なるもの」（1952年、桜沢如一訳）を読んだ。カレルが語った近代科学を超えた、人間の生命の不思議さ、肉体と精神の関係は、科学が進んだ現代でも解き明かされていないし、永遠に解明されないのかもしれない。しかし本書は、視点を「人間の関係」に着目し、今という変化の時代に、変わらないものを探ることにより、生きる13項目のヒントを易しく教えてくれる。コミュニケーション力は教育者になる上で非常に重要である。大学生活も友達との関係から始まる。本当に変わらない大事なものを、本書をヒントに探してほしい。</p>		

杉原央樹 先生

	書名	著者名	出版者名
	先生からのおすすめコメント		
1	教育学がわかる事典 ※	田中智志著	日本実業出版社
	<p>教育を知り、それを学ぶということは思うよりもずっと難しいことと思います。特に、自分の力で教育学について勉強するという時、何から始めればよいのか迷うということもあると思います。私も大学生時代に本格的に教育学を勉強しようとしていた頃、まず何から手をつけてよいか随分迷いました。ここで紹介させていただく『教育学がわかる事典』は、そのような時期に私が出会った本の一冊です。</p> <p>「事典」と名付けられているとおり、この本は教育学に関する百科事典のような形をとっており、一つのテーマについて2~4ページ程度で簡潔に考察・解説がなされています。著者の田中智志先生の解説は大変わかりやすく、また、「学力は測れるのか」、「子どもの変容」、「学校知の有効性」、「サブカルチャーの意味」、「女性らしさとは何か」等、興味をひくテーマが数多く取り上げられています。もちろん、それぞれを教育学的な視点で多角的に考察、検討しています。教育学研究の入門書の一つとして、また面白い読み物として、おすすめです。</p>		

高橋哲也 先生

	書名	著者名	出版者名
	先生からのおすすめコメント		
1	兵隊さんに愛されたヒョウのハチ	祓川学作/伏木ありさ絵	ハート出版
	<p>兵隊さん、ヒョウ、というワードから結末は想像がつくかもしれませんが。戦争と動物たちとの物語は数多く語られてきています。しかしそんな中であえて、なぜこのような結末を迎えなければならなかったのかを考えさせられる本です。文章は小学生向けに書かれており、大学生の気持ちで読むには物足りなさが残るかもしれません。しかし、将来、子どもたちに紹介したい本として、子どもの気持ちでどう感じるかを考えながら読むのにはちょうど良い内容と思われます。小学生向けの簡単な文章で150ページほどですので、読破するのにほんの1時間前後しかかかりません。特にネコなどペットを飼っている人には、動物が人の気持ちにどのような温かさをもたらすのか、ペット自身はどんなことを考えているのかということを考えながら、お家で飼っているネコやイヌと重ね合わせながら読むと良いと思います。</p>		
2	人生はニャンとかなる! : 明日に幸福をまねく68の方法	水野敬也, 長沼直樹著	文響社
	<p>茶トラの猫がアップで写っているかわいらしい表紙をめくると、「もし道に迷ったら、一番いいのは猫についていくことだ。猫は道に迷わない。」というチャールズ・モンロー・シュルツの言葉に意表を突かれる。難しい哲学の本なのかなと思ってさらにページをめくっていくと、そこには1ページを大きく猫の写真が占め、写真の下にはまさにぴったりとくるタイトルが付けられている。そのセンスの良さに思わずクスッと笑ってしまう。しかし、そのタイトルは嫌みがなく人生の中で大切なことを教えてくれる言葉となっている。1匹目の猫と言葉を楽しんだ後、そのページをめくると裏には、言葉が誰のものであったのか偉人の名前と説明が記載されており、どのような人生の中から生まれた言葉なのかを知ることができる。そのページの右には、すでに次の猫が次の偉人の言葉を紹介しており、知らず知らずのうちに68匹の猫たちから人生の大切な言葉を教えられていることを知る。最後には悩むのがバカらしくなるようなスカッとした気分になれる本である。本書は90万部、さらに続編の「人生はもっとニャンとかなる! 明日にもっと幸福をまねく68の方法」や犬を題材とした「人生はワンチャンス」などを合わせたシリーズ累計は180万部のベストセラーである。</p>		
3	わたしのげぼく	上野そら作 ; くまくら珠美 絵	アルファポリス
	<p>児童教育を学ぶ人にとって絵本は教育アイテムとして重要なものの一つです。こらからの大学生活で多くの子ども向け絵本を読むことになるでしょう。しかし、この本は“大人向け”絵本です。絵本ですからすぐ読めます。しかし、絵本ですから本から伝わってくる絵とそこに添えられた「わたし」の言葉のインパクトは一般的な本よりもすぐには消えないかもしれません。「わたし」が語るいかにもネコが思っているような考えが、あえて高飛車な表現をすることによって、「わたし」の「げぼく」に対する感謝や愛情として伝わってきます。ネコたちや私たちがこの世にやってきて一生を全うし、「そら」に行くまでにするこの意味を考えさせられる作品です。</p>		

坪井真理子 先生

	書名	著者名	出版者名
先生からのおすすめコメント			
1	クララ・シューマン	モニカ・シュテークマン著/ 玉川裕子訳	春秋社
<p>ドイツロマン派の作曲家ローベルト・シューマンの妻であり、ピアニスト、作曲家としても活躍をしたクララ・シューマン。</p> <p>女性の音楽家として世に出ることが難しかったヨーロッパ19世紀前半に、社会に認められピアニストとして活躍しました。</p> <p>ローベルトと結婚するまでの経緯は困難なものでしたが、音楽、そして女性として、自己実現にいたる生き方は、音楽そのものでした。</p> <p>この結婚は、類まれなる音楽科同士よって築かれた理想の共同体でした。彼女の存在によってローベルトは、溢れるインスピレーションを得ました。</p> <p>結婚生活は、ローベルトの精神的な不安定と溢れてくる音楽、家事によって、クララは幸福と幻滅に満ちていたとされています。</p> <p>7人の子どもを育て、その人生において、音楽を職業として生き、ローベルトが亡くなった時も「私の人生にとって、音楽はなくてはならないものです—今しばらく音楽のない生活に耐えねばならないようでしたら、私は間もなく破滅してしまうでしょう」と語っています。</p> <p>クララ・シューマンはその人生を通して、音楽と共に自己実現していった芸術家です。その自己実現の軌跡と音楽に対して生涯失われなかった真摯な生き方をこの本を通して感じてください。</p>			
2	野口体操入門：からだからのメッセージ	羽鳥操著	岩波書店
<p>音楽に関わるものとしての身体感はどうにあるべきなのでしょう。東京芸術大学で体育の授業をしていた野口三千三氏の身体感や授業に基づき、著者は直弟子として野口体操から得られる「からだからのメッセージ」をうけとるという感覚やその内容について述べています。野口三千三氏の身体感は「生きているからだは、皮膚という伸び縮み自由な大小無数の穴が開いている袋の中に液体的なものが入っていて、その中に骨も内臓も脳も浮かんでいる」というものです。音楽や芸術に関わっていく場合、自分の身体を自由にしかもじっとしていても、内部はものすごく動いていると感じたり、緊張と弛緩を自然に使うことが、表現力といかにに関わり、高めていくことができるのか。私自身は大学時代に野口体操と出会い、身体の在り方を自分自身に問い直す機会となりました。大変衝撃的で歌うこと・ピアノを弾くこと・楽器を演奏して表現していく上で、身体の見え方の転換で自分自身の在り方そのものが変わってきました。本書では身体感覚を蘇らせる、重さ・はずみと筋力、上体のぶらさげ・ストレッチの意味など体操そのものにも詳しく解説もあります。この本を通じて、今一度表現することと、身体の在り方について考えてみましょう。</p>			
3	音と言葉, 19刷改版	フルトヴェングラー [著]/ 芳賀檀訳	新潮社
<p>ドイツの指揮者フルトヴェングラー氏が様々な論文、講演を収録したものです。一人の音楽家が真摯な態度で音楽と向き合った論考はクラシック音楽、とりわけドイツリートに強く惹かれていた私にとって宝の山のように感じました。音楽と詩における2元性の同一化、言葉という現実が音楽の自由な翼を得たことにより、より芸術的に拡がりを持つのです。リートの終局の印象は詩の美しさそのものによるものだけではなく、それが音楽的な実現になり得るものであると書かれているところでは、深い感動を覚えました。「ヒンデミットの場合」と題した章では、ナチスが退廃作曲家としてヒンデミットの作品の初演を拒んだときに新聞に投稿されたものであり、彼を擁護したことにより、フルトヴェングラーはベルリンフィル等の公職を辞することとなりました。これに言えるように彼の生き方は誠にシンプルで、単純なものは美しいという冒頭の言葉そのものです。大変な時代を音楽とともに生き抜いた指揮者、その時代の人々の息遣いと音楽の流れを十分感じることでできる意義深い本です。</p>			

出木良輔 先生

	書名	著者名	出版者名
先生からのおすすめコメント			
1	日本の思想 一言で表せば、『歴史を教訓にする』とはどういうことかを実践的に示した本だと私は思う。この本に収録されている評論文、『『である』ことと『する』こと』を高校の現代文で読んだという人も多いだろう。 著者の丸山眞男(真男)は1914(大正3)年生まれの政治思想家。民主主義思想が広がる大正期に思想形成した丸山だが、ほどなくして彼は、メディアに踊らされながら戦争遂行に邁進する日本人の姿を目の当たりにする。強かな民主主義の主体を、そして何より自立した個人を形成するにはどうしたら良いのか? そのような問いに向き合い続けた丸山の思索の痕跡が、この本にはありありと刻み込まれている。 コロナ禍は流言飛語(デマ)に流される大衆の脆さを浮き彫りにした。私たちとそう遠くない場所では侵略戦争(そこには必然的にメディア操作が伴う)が今も続いている。今こそ歴史に学ばずして、いつ学ぶというのか?	丸山眞男著	岩波書店
2	「舞姫」の主人公をバンカラとアフリカ人がボコボコにする最高の小説の世界が明治に存在したので20万字くらいかけて紹介する本	山下泰平著	柏書房
<p>本書はもともとブログ記事として執筆されていたもので、読みやすく親しみやすい点に魅力がある。 著者は時代やメディアを縦横無尽に駆け巡りながら「文学史」に名を残すことのなかった文学作品を発掘し、光を当ててゆく。小説「壺カラ奇旅行」もその一編。タイトル通り主人公がハイカラ(今風に言えば「陽キャ」)を殴り歩く冒険旅行を繰り広げ、「舞姫」に登場する太田豊太郎(を思わせる人物)をボコボコにするという荒唐無稽な内容である。著者はこれらの作品を読む楽しさを自由自在に語る。もっと評価されるべきものの魅力を自由により良く語ろうという熱意が本書には充満している。このような筆者の身振りは、日頃「推し」の素晴らしさについて私に熱弁してくれる学生たちの姿ともどこか重なる(ように思う)。 大学生は日々の生活の中で、「自分の考え」を「自分の言葉」で表現することを陰に日向に繰り返し求められる。その反復により、言語表現そのものに苦手意識を抱いてしまう人も少なくないようだ。 しかし様々な物語を読んであれこれ考えること、そして「自分の考え」を「自分の言葉」で表現することは、本来楽しく豊かで、そして何より自由な行為なのである(そう、「推し」を語る時のように!)。本書はそのことを私たちに気づかせてくれるだろう。</p>			
3	パンドラの匣 挑んでほしいんですよ。 太宰治と聞くと何となく暗いイメージを連想する方が多いと思いますが、明るく前向きな人生観を与えてくれるような作品も実は多いんです。太宰と言えば「走れメロス」くらいしか知らない…にもかかわらずこの文章をここまで読んでしまったあなた。あなたはすでに太宰治に興味を持ち始めているのではないかと推察します。折角です。大学生活もそれなりに長いわけですし、何やらちょっとだけ難しそう(でも読んだらなんか頭良くなりそうな)タイトルのこの本に挑んでみませんか? では、ここに収録された作品から、私が最も好きな一節を以下に引用してお別れといたしましょう。元気で行こう。絶望するな。では、失敬。 学問なんて、覚えると同時に忘れてしまってもいいものなんだ。けれども、全部忘れてしまっても、その勉強の訓練の底に一つかみの砂金が残っているものだ。これだ。これが貴いのだ。勉強しなければいかん。そうして、その学問を、生活に無理に直接に役立てようとあせってはいかん。ゆったりと、真にカルチベートされた人間になれ!(「正義と微笑」)	太宰治著	新潮社

羽澄直子 先生

	書名	著者名	出版者名
	先生からのおすすめコメント		
1	ソロモンの偽証	宮部みゆき著	新潮社
	<p>各巻が700ページを越える本の厚みと重さに最初は圧倒されるかもしれませんが、読み始めると宮部ワールドにぐいぐい引き込まれます。物語はある中学校でひとりの男子生徒が命を落としたことから始まります。この痛ましい「事件」から広がる波紋のどこかに、読者の誰もが一度は経験したであろう場面がきっと出てきます。それは楽しい思い出ばかりではなく、心の傷をえぐるような辛い出来事かもしれません。しかし物語の中学生たちはそれぞれの立場から、恐怖や迷いと闘いながら自分たちが直面する問題に真剣に対峙します。何が本当で何が嘘なのか、当事者である彼らが解決法として選んだのは、前代未聞の「中学生による模擬裁判」でした。</p> <p>2014年には文庫本(全6巻)が発売され、最終巻には新たな書き下ろしの「後日談」が載っています。裁判で切磋琢磨した中学生たちがどんな大人になったのか、ちょっと覗いてみて下さい。2015年には映画化もされました。こちらの鑑賞もお勧めです。</p>		
2	村上海賊の娘	和田竜著	新潮社
	<p>戦国時代に瀬戸内海を支配していた村上水軍の姫、景(きょう)は華々しい戦にあこがれ海賊働きに明け暮れる破天荒な娘。ひょんなことから一向宗の門徒たちを守るうちに大阪湾での織田軍との死闘に巻き込まれます。この小説の醍醐味は壮大で臨場感溢れる戦闘場面ですが、スパイスとして注目したいのがひんぱんに「醜女」と描写される景の容姿です。身の丈6尺(約180センチ)の痩身で長い手足、小顔で鼻は高く、目は大きく眉は両の目に迫り、口は大きく唇は分厚い。当時の日本の美女といえれば小柄でふくよか、顔はのっぺり色白で筆で描いたようなすっとした目鼻立ちだったので、景の形相は鬼か化け物のように扱われ、さすがの荒くれ娘も内心穏やかではありません。ところが南蛮人(西洋人)を見慣れている泉州堺の男たちは景を絶世の美女とほめたたえます。初めてのモテ期に景はうかれますが、見た目の美醜の判断基準なんてこのように相対的で気まぐれなものなのです。</p> <p>やがて戦いはらむ悲惨で冷酷な本質を知り、己の弱さと浅はかさを恥じた景は、ところや立場が変われば簡単にひっくりかえるのは美醜だけでなく、戦の正義、善悪などの価値観も同じだと痛感します。極限状態の戦闘で景を支えたのは「自分がどうありたいか」という己の信念でした。周囲の大人の男たちの打算や思惑をぶっ飛ばす景の信念の破壊力は豪快ですが痛々しさもにじませます。景をとりまく登場人物たちの生き生きとした個性もこの小説の魅力です。</p>		

服部幹雄 先生

	書名	著者名	出版者名
	先生からのおすすめコメント		
1	コミュニケーションのレッスン	鴻上尚史著	大和書房
	<p>「自分の気持ちをうまく伝えられない」「会話で自分だけ浮いているように感じる」「反論しようとするとかんかになってしまう」などコミュニケーションで悩んでいませんか。一般にコミュニケーションは無意識のうちに行なわれているので、私たちは自分のコミュニケーションのどこに問題があるのかに気づかないものです。まずは自分のコミュニケーションスタイルを客観的に見る必要があります。「コミュニケーションは技術であるから練習すればするだけ上達する」との考えに基づいて、演出家の著者が「コミュニケーションがうまく行かない原因」の分析から、「聞く・話す・交渉する」方法に至るまで有益なアドバイスを与えてくれます。コミュニケーションのエキスパートたる教育者・保育者を目指している(でもちょっとコミュニケーションは苦手という)人にとって目からうろこの一冊となるでしょう。</p>		

2	ことばの力学：応用言語学への招待	白井恭弘著	岩波書店
<p>ことばは無意識のうちに私たちの思考や行動に影響を与えます。同じ状況を伝える場合でも言い方を変えれば印象はまったく異なってくることもよく体験することです。ことばで人を和ませたり楽しませることもできる反面、ちょっとした言葉で人は傷ついたりします。ことばは素晴らしいものであり、不思議なもの、こわいものでもあります。このようなことばの持つ力を応用言語学の最新の研究に基づいて科学的に分析したのが本書です。ことばとコミュニケーションに正面から向き合うのが教育者・保育者です。皆さんに一読をお勧めします。「標準語と方言」、「手話」、「言語障害」、「言語教育」などのテーマが扱われています。</p>			
3	ことばの発達の謎を解く	今井むつみ著	筑摩書房
<p>赤ちゃんは大人の支えなければ一人では何もできません。しかし、そんな赤ちゃんに大人がよってたかってもかなわないことがあります。それはことばの獲得です。子どもは周りの人たちの断片的な会話に接しながら、ほんの数年で母語（日本語圏で生まれた場合は日本語）の基本的骨格を身に付けてしまいます。例外的な場合を除き、獲得に失敗することはまずありません。これは、私たちが外国語の習得で苦勞してきた経験を考えれば驚くべきことです。なぜそんな神業が可能なのでしょう。本書では観察や実験による実証によって、実に分かりやすくことばの獲得のメカニズムが紹介されています。特に三重苦を背負ったヘレン・ケラーが「ことばの役割」に気づくくだりを読むと、私たちが当たり前と感じていることばの素晴らしさ・不思議さが改めて実感できるでしょう。みなさんがだれもが体験した（でもだれもその過程を覚えていない）ことばの習得の世界を覗いてみませんか。ことばの発達を手助けする教育者・保育者を目指す人にとって興味深い一冊になると思います。</p>			
4	音とことばのふしぎな世界：メイド声から英語の達人まで	川原繁人著	岩波書店
<p>ここに「サタカ」という名前の女の子と「ワmana」という名前の女の子がいるとします。何となく「ワmana」という名前はおっとりしていて、「サタカ」という名前はキリッとしている感じがしませんか。また「あ」と「い」という発音を比べると「あ」の方が大きく、「い」の方が小さい感じがしませんか？これは音から意味の連想がおきる現象で、言語学（音声学）では音象徴と呼ばれています。本書には、音象徴のほか、50音図の謎（なぜ「か→さ→た→な…や→ら→わ」という順に並んでいるのか？）、声紋分析（なぜ電話の会話では相手の声を間違えるのか？）、発音の習得（なぜ赤ちゃんはテレビで音は学ばないのか？なぜ外国語の発音はうまくできるようにならないのか？）、福祉音声学（言語障害や声を失った人への支援）など興味深い話が目白押しです。音楽・外国語教育・医学・心理学・法学に貢献する言語学（音声学）の威力、面白さ、醍醐味が味わえる一冊です。</p>			
5	子どものうそ、大人の皮肉：ことばのオモテとウラがわかるには	松井智子著	岩波書店
<p>3歳児の使う日本語は、使える単語も増え、文法も一通り使いこなせるようになり一見流暢に聞こえますが、うそをつくことができず、またうそをつかれていることを理解することもできません。うそを理解できるようになるのは4歳以降、皮肉が分かるようになるのは9歳ぐらいからとされています。ことばの文字通りの意味でなく、その意図を理解する力（＝語用能力）が長い期間をかけて発達していく高度な能力であることがよくわかります。分かりやすい例を挙げれば、皆さんが教室でよく言う「先生、ちょっと寒いです」の意図は「エアコンの設定温度を上げてください」という依頼のはずです。本書では豊富なエピソードを交えながら子どもの語用能力の発達、高機能自閉症の人が抱える語用障害などが分かりやすく説明され、これを踏まえて、著者は「聞き手はどのように話し手の意図を理解するのか」というコミュニケーションの本質へと迫っていきます。コミュニケーションが苦手、会話上手になりたいと考えている人にとっては興味深い一冊になるでしょう。言語学（語用論）、言語習得論の入門書としても優れています。</p>			
6	英語学習7つの誤解	大津由紀雄著	日本放送出版協会
<p>母語である日本語は無意識に身に付けてきたのに、なぜ英語学習ではこんなに苦勞するのだろうか？これは皆さんだけでなく、多くの英語学習者が持つ疑問でしょう。これに対して巷にはさまざまな俗説が満ち溢れています。たとえば、(1)英語は外国語の中でも特に習得しやすい言語である、(2)英語学習は早く始めるほどよい、(3)留学すれば確実に英語力がつく、(4)英語はネイティブスピーカーから習うのが効果的、などです。この本は、最新の理論や経験に基づき、以上の4つを含む7つの俗説が誤解であることを明快に示し、効果的な英語学習のあり方を分かりやすく紹介しています。上級者にも英語学習に悩んでいる人にも有益な一冊となるでしょう。なお、ことばの本質について書かれた付録1、辞書・文法書が紹介されている付録2も付録ながら必読のコーナーです。</p>			

7	ちいさい言語学者の冒険：子どもに学ぶことばの秘密	広瀬友紀著	岩波書店
<p>日本語を母語とする私たちは、普通に会話をするだけなら何の苦労もなく日本語を使いこなしています。しかし、その日本語を身に付けてきた過程はほとんど思い出すことはできません。また、日本語が母語であれば、ある表現が自然か不自然かは直感的に分かりますが、なぜそうなのかは説明できないのが普通です。たとえば「だれが来たんですか?」とは言っても「*だれは来たんですか?」とは言えないことは直感的に分かりますが、なぜかと問われれば返事に窮してしまうはず。ここには確かにことばの仕組みが関わっていますが、それは頭の中であって私たちは直接それを見ることはできず、説明もできないということです。しかし、日本語を習得する途上にある小さな子どもや日本語を学習している外国人のことばをじっくり観察すると、目には見えないことばの仕組みを知る手がかりを得ることができます。本書では「子どもの頭で起きていること(大人になった私たちの頭の中でかつて起きていたこと)」、「直接見られない頭の中にあることばの仕組み」について実に分かりやすく説明されています。子どもの言語発達と向き合う皆さんにとって有益な一冊となるでしょう。外国語(英語)教育に対しても重要な示唆を与えてくれます。言語学・言語習得理論の面白さをぜひ本書で味わってください。</p>			
8	新しい言語学：心理と社会から見る人間の学	滝浦真人編著	放送大学教育振興
<p>レストランで店員さんから「ご注文は以上でよろしかったでしょうか」などと聞かれることがあります。考えてみればおかしい表現ですね。今まさに注文しているのになぜ過去形の「た」を使うのでしょうか。結論を言ってしまうと、この「た」は丁寧さ(対人配慮)の「た」です。現在のことは現在形で過去のことは過去形で言うと言語学で考えると簡単に考えていた人も多かと思いますが、ことばはそれほど単純なものではなく、人間の心や人を取り巻く社会と深く関わり、実に精密な仕組みを備えているものです。本書には、認知言語学・社会言語学・語用論・言語習得論などの分野が実に分かりやすい用例とともに紹介されています。子どもと「ことば」で向き合う教育者・保育者を目指す皆さんに一読をお勧めします。ことばの面白さ・不思議さが体験できるでしょう。</p>			
9	その言い方が人を怒らせる：ことばの危機管理術	加藤重広著	筑摩書房
<p>「謝ったつもりなのに人を怒らせてしまった」「きちんと敬語を使ったつもりなのに相手を不愉快にさせてしまう」このような経験はありませんか?コミュニケーション上の行き違いには感覚的に語られることが多いのですが、その背後には必ず言語学的な理由があります。機械的に「敬語」を勉強しただけではコミュニケーションを円滑に進めることはできません。周囲と円滑な人間関係を築き、教育者として子どもに伝わる「ほめる、叱る」が出来るようになるためにも「文脈とことば」を科学する新しい言語学の分野「語用論」が役に立ちます。コミュニケーションを科学する面白さを味わえる一冊です。</p>			

堀祥子 先生

	書名	著者名	出版者名
先生からのおすすめコメント			
1	「家庭料理」という戦場：暮らしはデザインできるか?	久保明教著	コトニ社
<p>世間では「デザイン思考」なる言葉があふれ、ビジネス書のタイトルにもその言葉が付いたものもたくさん出版されています。そもそもデザイン思考とは何かを調べてみると、ユーザー視点で悩みや願望を共有し、モノやコトをニーズに合わせて定義し、創造したり、作り替えたりしたのちに仮説を立て、検証していく思考プロセスのことであるようです。文化人類学者であるこの本の著者は、知人が「(研究活動をやめて)私、結婚したら毎日違う料理をつくるんだ!」との明るく希望に満ちた発言に興味を持ち、本当にそんなことが可能か否かを、著者自身が「家庭料理」というフィールドに赴き、作って、食べて、考える参与観察的考察していきます。</p> <p>毎日、違う料理を作ることができればインスタのフォロワーは増えるに違いない!と今の時代に生きる皆さんは思うかもしれません。それを手伝うツールとして「クックパッド」や「クラシル」といったアプリもあり、可能なように思えます。しかし、そうやってつくられた料理は一体、誰のための料理であり、何のために作るのか考えてみてください。そもそも料理とは何なのか、果たしてデザイン思考をもって生み出される料理はあり得るのでしょうか?</p> <p>本来は「生きるために食べる」人間の営みが、現代社会でどのように取り扱われるべき行為なのか、本書の最後のページに書かれた「さて、あなたは明日なにを食べるのだろうか?」の一言に、はっとすると同時に深く考えさせられます。</p>			

2	<p><u>冒険者たち：ガンバと十五ひきの仲間</u></p> <p>町ネズミのガンバは、住むところも食べるものも何不自由なく暮らしている。ある暗い雨の日の夜、仲間のマンブクにこう持ちかけられる。「ガンバ、海にいかないか。」</p> <p>最初は乗り気でなかったガンバ。住み慣れた町を離れ、港で出会った船乗りネズミの力持ちのヨイショや思慮深く学ばに長けたガクシャ、何でもサイコロの目で決めるイカサマなど一癖ある仲間たちと一緒に船に乗り、無限に広がる海に感激し、たどり着いた島での冒険の旅。途中で加わった島ネズミたちなど多くの仲間と力を合わせ、リーダーとして恐ろしいイタチのノロイー党に立ち向かう話である。</p> <p>学校の図書館でこの本を見かけ、児童文学書としてはハードカバーでページ数も多い「すごい本」と思っていました。私が小学校の低学年の頃、絵本や比較的文字の大きな書籍などに物足りなくなり、ついにこの本を手取る時が来た!と思い、果敢に読み始めたことを思い出します。</p> <p>小さなネズミたちの目から見れば、私たちの住む町も海も山も川も、すべて途方に暮れるような大きな宇宙です。そのなかで、必死に生きるために仲間と知恵を出し合い、助け合い、時に酒を酌み交わし、踊り、歌う姿は、現代を生きる私たちの姿と何の変わりもありません。ひとりでは出来ないこともチームで動くことで解決できる。そんなことを私に教えてくれた一冊です。</p>	斎藤惇夫作/藪内正幸画	岩波書店
3	<p><u>最貧困女子</u></p> <p>みなさんは年収いくらからが「リッチ」で、いくら以下が「プア」だと考えていますか？</p> <p>この本の出版された2014年のデータでは、働く単身女性の3分の1が年収114万円未満であること、特に10代から20代女性に貧困が集中している事を挙げており、筆者はそれを引き合いにして、そもそも貧困とは何か?と、問いかけることから始まります。</p> <p>ルポライターである著者は、人は低所得に加えて「三つの無縁」と「三つの障害」から貧困に陥る、と考察しています。保育や教育を学ぶみなさんにはピンときたかもしれませんが、「三つの無縁」とは「家族の無縁・地域の無縁・制度の無縁」であり、「三つの障害」とは「精神障害・発達障害・知的障害」であるとし、これらがオーバーラップして貧困に陥るのだとしています。</p> <p>しかし、この本のタイトルにある「最貧困女子」とは、世の中のこうした分類・分析・論証や議論からはずれたところにいる女性、そして未成年の女子たちであるとしています。本文では「最貧困女子」の多くがセックスワーク(売春や性風俗産業)に埋没している様子を体当たりで取材し、彼女たちの貧困や抱えた苦しみや痛みを「可視化」しようと試みています。その内容には私たちの想像を絶するものもありますが、常に差別と無理解と糾弾の対象である彼女たちを救う手だてはどこにあるのかを考えながら取材を続ける筆者の姿に、みなさん自身の姿を重ね合わせながら読み進めてみてください。「社会的弱者」とはどんな人たちなのかを知り、「支援の在り方」を考えるきっかけにして欲しいと願っています。</p>	鈴木大介著	幻冬舎
4	<p><u>にげましょう：災害でいのちをなくさないために、特別版</u></p> <p>この本の帯には「にげること生きること」との見出しがあります。1分1秒が生死を分ける巨大災害、地震や噴火のような自然災害は、始まりから終息まで比較の見通しがつく「難」ですが、原子力発電所事故のようにおこった直後から長期にわたって危険が続く「難」もあります。</p> <p>危険には種類があり、それらがどのように私たちに襲ってくるかがわかれば、どのように逃げればいいのか、そのタイミングはいつなのかも分かります。いのちをつなぐ避難のタイミングはまず学ぶことからなのだ、ということが、この本には分かりやすい絵と簡潔な文章で示されています。</p> <p>新しく改定された保育所保育指針および認定こども園教育・保育要領では、災害への備えや子どもの安全面の確保について留意するよう記載されています。また、保護者や地域と連携して行うことも重要であると述べられています。</p> <p>まずは、保育者になる皆さんが災害に対して正しい知識を持っているか、が問われます。まずは自分の身を守り、もちろん子どもの身を守るために、この本で学んでください。</p>	河田恵昭著/河田恵昭, GK京都編集	共同通信社

5	縁食論：孤食と共食のあいだ	藤原辰史著	ミシマ社
<p>この本のタイトル"縁食"は著者による造語です。国籍や性別、人種、年代、貧富、宗教からも解き放たれて、人々がただその場に居合わせ、「おいしいごはんを食べる」ことでゆるやかに居心地のよい「並存」する場を形成していくといった意味合いでしょうか。サブタイトルにある"孤食"や"共食"のあいだにあるとも位置付けています。</p> <p>現代社会において、"食"という人間が生存していくために不可欠な行為には多くの問題が見え隠れしています。その影響を一番に受けるのは常に子どもたちです。「おいしいごはんを食べる」ことができる子どもたちはいつの時代も幸せです。著者は、誰もがそれを享受するための仕組みのデザインとして"縁食"を提案し、その可能性を本の中で解き明かしていきます。</p> <p>2020年は、Covid-19の流行で"新しい生活様式"が提唱され、みなさんがこれまで当たり前のように過ごしてきた、気心知れない誰かと一緒にご飯を食べ、お茶を飲み語らいながら過ごす日常が"非日常"へと転換しました。それがいかに心に温かいひとときであったかを思い知らされた人もいれば、意味のないおしゃべりから解放されてほっとした人もいたかもしれません。この両者の関係を解きほぐすヒントも"縁食"には隠されているように思います。</p>			
6	家をせおって歩く：かんぜん版	村上慧作	福音館書店
7	家をせおって歩いた	村上慧著	夕書房
<p>この絵本と書籍の2冊は、同じ作者の本です。作者は、1988年生まれ、東京育ちのアーティストであり、「移住を生活する」をテーマにして、発泡スチロールで自作した小さな家を背負い、日本国内や韓国、ヨーロッパを回り、各地の民家の絵を描きながら、そこでの生活をつづったお話です。</p> <p>作者は「僕らの生活は思った以上に閉じたものであること」そして「僕たちは閉じ込められている」とし、定住するために必要なお金を得るために、「職場が定めた「ダンス」をいかに完璧に踊りこなすか」を求められる生活への疑問から、家を背負って歩き始めます。作者がその行為に至るのには、2011年の東日本大震災も一層その思いを強くした要素であることも伺えます。</p> <p>『家をせおって歩く かんぜん版』は、「たくさんのふしぎ」シリーズの一冊ですので、子どもを読者として出版されています。作者自作の家や移動する先々の街の様子など、写真が沢山載っており、歩いた街の地図などのイラストも描かれているので、読者の子どもたちの目には、きっとその家は憧れの秘密基地のように見えると思います。そして、この本を眺めていると、人間には移動の自由があり、そして心の自由があることを強く思います。自分は人として生きているだろうか？すなわち、きちんと人権を行使しているだろうか？と改めて考えるきっかけになる一冊です。</p> <p>もちろん、移動の自由や心の自由には、葛藤も付きものです。そちらは『家をせおって歩いた』の方に書かれています。作者の移動の記録が日記調で書かれています。その日に会った人たちとのエピソードを中心に、作者の考えたことや心の内を吐き出し、整理するかのように記され、身の回りの出来事は自分事として丁寧に引き受けている姿が印象的です。</p> <p>作者は文中で、絵を描くときは一本の線を描くことのみ集中していること、繰り返し線を引くうちに大きな全体像が浮かび上がることが、家をせおって歩く行為と重なる、と述べています。何が起こるか分からない今の社会だからこそ、ますます「自由」の大切さを見直すことが必要かもしれませんし、先にも述べた「人として生きる」こととは、案外些細なことの積み重ねなのかもしれないことをこの本は教えてくれます。</p>			
8	目の見えない白鳥さんとアートを見に行く	川内有緒著	集英社インターナショナル
<p>全盲の白鳥健二さんが白杖をつき、どこへでもアートを見に行くエピソードが、同行する筆者の目線から明るい口調でつづられています。</p> <p>一枚の絵を前に「なにが見えるか教えてください」から始まる美術鑑賞。同行者の川内さんやその友人たちは、様々な言葉を使って、絵の解説を読んだだけでは伝わらない絵の中の要素を伝えますが、さて、会話はどんどんいろんな方向へ飛び散っていくようで・・・</p> <p>そのやり取りから、絵を「みる」ことって、実はこんなに愉快で楽しく、障がいがあるから、ないから、普段からアートに触れていないから、そんな「些細な事」を気にする必要がないことを白鳥さんの行動が示してくれます。</p> <p>美術館って難しそう、絵を見るってどういうこと？そんなことを思っている人におすすめです。旅先や近所でアートに出会うことがこんなに世界をひろげてくれるのか！と目からうろこが落ちますよ。</p>			

堀部要子 先生

	書名	著者名	出版者名
	先生からのおすすめコメント		
1	にんげんだもの	相田みつを著	文化出版局
	<p>「つまづいたっていいじゃないか にんげんだもの」 この言葉にどれだけ多くの人が救われ、勇気づけられたことでしょう。 「にんげんだもの」では、詩人・書家である著者が、力強い書で、人間のありようや生き方、命の尊さを語りかけてきます。辛いことや悲しいことがあった時にこの本を開くと、だんだん元気が湧いてくる、そんな一冊です。 それにね、皆さんが教職に就いた時にきっと役立つことでしょう。実は私、「にんげんだもの」にある詩を、子どもたちに「贈る言葉」として届けていました。例えば、卒業アルバムのはなむけの言葉として、あるいは終業式や行事日の朝の黒板メッセージとしてです。「にんげんだもの」にある数々の詩は、子どもたちへの力強いエールになると思います。 ※ 現代仮名遣いとしてのひらがな表記は、「つまづく」です。しかしながら、「つまづく」という表記でも間違いではないことになっています。</p>		

梶川知 先生

	書名	著者名	出版者名
	先生からのおすすめコメント		
1	18歳からの教養ゼミナール	家田愛子編著	北樹出版
	<p>「18歳からの教養」とは、大学で学んだ者であれば、最低限これくらいの教養・知識・モラルは身につけてほしいという程度の雑学としての「大人の教養」のことです。将来、教職を目指す多くの皆さんに、専門教養の学びと並行して、社会人としての学びを深め、自分自身の「ものの見方・考え方」の幅を広げていってほしいと願っています。「人権問題」「ジェンダー問題」「子どもの人権の問題」「どう働くか、どう生きるかの問題」「人と人との繋がりに関する問題」「環境問題」「健康管理の問題」など、広くそしてある程度の深みをもって学ぶことができます。 さらに、第Ⅱ部として、「学びのスキル：絶対に必要な技」があります。ここでは、「レポート・レジュメ作成の心構え」「レポートの書き方」「大学図書館の利用法」などについても書かれています。 さあ、あなたも、「教養ゼミナール」に参加してみましよう。</p>		
2	友だち幻想：人と人の「つながり」を考える	菅野仁著	筑摩書房
	<p>あなたには、きっと、素敵な友だちが何人もいることでしょう。相談したり、旅行したり、話し合ったり。時には、何も話さないで一緒にいることが、すごく楽しく意味あることのように感じたこともあるでしょう。そんな友だちとの在り様を、ちょっと振り返ってみませんか。この本は、そのためのきっかけを教えてください。 以下、この本に書かれてある推薦文を記しておきます。 『友だちは何よりも大切。でも、なぜこんなに友だちとの関係で傷つき、悩むのだろう。人と人との距離感覚をみがいて、上手に<つながり築けるようになるための本。』</p>		

村田あゆみ 先生

	書名	著者名	出版者名
先生からのおすすめコメント			
1	長くつ下のピッピ	アストリッド・リンドグレン 作/イングリッド・ヴァン・ニ イマン絵/菱木晃子訳	岩波書店
<p>ピッピ・ナガクツシタは世界一強い9歳の女の子です。赤毛のおさげとそばかすがトレードマーク。ママは天国、船長さんのパパは嵐で行方知れず。「ママは天使で、パパは南の国の王さま。こんなすてきな親をもっている子どもは、そうめったにいないのよ」と「ごたごた荘」と名付けられた古家でひとり暮らしを謳歌しています。同居人はサルと馬。ピッピは大金持ちでとても力持ち。馬一頭をかるがる持ち上げます。学校にも行かないし、自由奔放なピッピは「子どもの一人暮らしはよくない」「学校に行かなくてはならない」と考える周囲の大人の常識をその奇抜な発想で振り回します。日頃たくさんの決まりごとががんじがらめになっている子どもたちの真逆の世界でピッピは生きています。</p> <p>この作品は1945年にスウェーデンで出版されました。出版当時、あまりにも自由すぎるピッピの言動に大人たちは眉をひそめ、教育論争までが巻き起こりました。しかし「子どもは遊ぶこと、自由と安心が保証されていることが何よりも大事である」という作者リンドグレンの信念は80年近くたった現在も古びることはありません。</p> <p>はちゃめちゃで楽しいピッピの物語の根底にしっかりした教育観や子ども観が存在しています。教育や保育の分野で活躍したい皆さんにはぜひ読んでほしい児童文学です。</p>			
2	きみはいい子	中脇初枝著	ポプラ社
<p>本書は虐待を題材とした連作短編集です。「サンタさんの来ない家」「べっぴんさん」「うそつき」「こんにちは、さようなら」「うばすて山」の5編が収められています。時代は現代、舞台は郊外の新興住宅地。大学新卒の小学校教員、公園で子どもを遊ばせるママたち、地域で自営業を営む父親、ひとり暮らしの老女、認知症の母親を預かることになった働く女性が登場します。学級崩壊や虐待児童、虐待の連鎖や発達障がい、ネグレクト、介護の問を軸にそれぞれの物語は展開します。</p> <p>著者は「(虐待を)された側」よりも「した側」に視点をおいて「した側」の人のほうが深く重いものを抱えているのではないかと問いかけます。特別な悪人が虐待をする訳ではない。誰もが何かのきっかけで起こしてしまうかもしれないのです。核家族だ、大家族だ、地域のつながりが希薄だ、濃密だ、が虐待の背景や環境ではないと著者は考えています。</p> <p>虐待をなくすためにはどうすればいいのでしょうか。「その人が認められていることを実感しながら暮らせる」ことが最も重要です。子どももそしてその親たちも。教育や保育の現場で働くことを考えているみなさんにとって重い問題をつきつけているそんな1冊です。</p>			
3	うそつきの天才	ウルフ・スタルク著/菱木晃 子訳/はたこうしろう絵	小峰書店
<p>教育者、保育者をめざしている皆さん、「うそをつくのはだめ」ですよ。</p> <p>スウェーデンを代表する児童文学作家ウルフ・スタルクのこの作品には「うそつきの天才」「シェイクvs.バナナ・スプリット」の2編の「うそ」の物語が収められています。</p> <p>第1話は、うそがバレた「ぼく」が叱られるのが怖くて家出をしてしまう話です。うそはうそを招き、うそを積み重ねます。けれどもパパとママは怒らずに「したことをそのとおり、話せばいい。そうすれば、すべてうまくいく。」と抱きしめてくれます。でも翌日、「ぼく」は家出話を盛って盛って盛って語り、クラスのヒーローになるのです。</p> <p>第2話。「ぼく」は作文でクラスメイトと競い合います。先生は「きみの身近に起きたことをそのまま書けばいい。話をつくる必要はない」と「ぼく」の作文を褒めてくれます。実は「ぼく」の作文は全くの作り話だったのですが・・・</p> <p>主人公「ぼく」は作者の子ども時代を想起させます。物語の舞台は60年以上も昔のスウェーデンですが、そこで学校に行き、遊び、悪戯をし、友だちと過ごす姿が生き生きとユーモラスに描かれており、思春期の子どもはいつの時代もどこの世界でも変わらないことを感じさせます。</p> <p>うそをつくのはだめ。なのに人はなぜうそをつくのでしょう。うそと空想の境界はどこにあるの？ テンポよく進んでいく話に引き込まれながら、読後いろいろ考えてみたくなる1冊です。</p>			

山田勝 先生

	書名	著者名	出版者名
	先生からのおすすめコメント		
1	ボクの音楽武者修行	小沢征爾著	新潮社
	<p>「世界のオザワ」と言われた、日本を代表する指揮者の小澤征爾が、2024年2月に88歳で亡くなりました。この本は、中国に生まれた日本人であり、日本で音楽教育を受けた小澤征爾が、どのようにして「世界のオザワ」になったかを自伝的に描いた半生記です。当時の日本人で世界に通用する音楽家はほぼいない状況で、ヨーロッパでも「日本人にバッハが分かるか」と考えられていた時代です。そんな時代の風潮に逆行して、小澤は次々と難関を突破して突き進んでいき、当時の世界的に名だたる音楽家たちにどんどん認められていきます。読んでわかるのは、小澤に才能があることはもちろんのこと、その桁外れのバイタリティと努力のすごさです。それが、小澤の人柄や語り口のおかげで、まったく鼻につくことがなく、むしろ痛快と言って良い印象を受けます。小澤と同世代の日本人は、第二次世界大戦後の復興を体験し、その後世界の経済大国へとの上昇していく日本の道程と、世界の檜舞台へと飛び立っていく小澤の活躍を、重ねて見ていたことでしょう。読むと、読み手に元気と勇気がわき、新たな挑戦をしてみたくなる、そんな本です。</p>		

山本忠 先生

	書名	著者名	出版者名
	先生からのおすすめコメント		
1	ビジュアル図鑑 今と未来がわかる 脳と心	毛内拓監修	ナツメ社
2	脳を司る「脳」	毛内拓著	講談社
3	脳の話	時実利彦著	岩波書店
	<p>最近脳の研究が、テレビ番組にコメンテーターとして登場しますね。私も脳の知識を得ておこうと書店を訪れたら、[1]が目にとまりました。わかりやすいのです。この監修者が[2]の著者であることがわかりました。実は、新聞の書評で[2]を見て気になっていたのです。[1]を読んで、詳しく知りたい項目があれば、[2]を参照するという読み方で充分だと思います。</p> <p>かつて、著名な数学者の岡潔が脳の機能を基にして、随筆で教育論を展開していました。岡先生の教育論の根拠が[3]だったのです。[3]はロングセラーで現在でも出版されています。[2][3]を読み比べると、科学の進歩の典型をみることができます。</p> <p>脳の知識を得ると、日常生活に役立つでしょうか。たとえば、ショッキングな出来事に出くわしたら、「やや!私の扁桃腺くんがアラームを出してくれているぞ。でも大丈夫。すぐに隣の海馬さんが私を冷静にしてくれるはず。最後は、前頭連合野さんが出てきてくれるから安心。」、「最近、ストレスが続いているなあ。このままではコルチゾールが減ってしまうよ。明日は休養だね。」このように考えると、自分を客観視できて生き方が少し楽になるかもしれません。脳の本はお薦めです。</p>		

吉川直志 先生

	書名	著者名	出版者名
	先生からのおすすめコメント		
1	生きるぼくら	原田マハ著	徳間書店
	<p>心が温かくなる本です。きっと、いろいろ自分のことと比べながら読み進めるはず。自分の心の温かさがどこにあるのかを知りたい方は、是非、読んで下さい。読むと、おにぎりが食べたくになりますよ。それはどんなおにぎりでしょうか。これは、いじめから引きこもりになってしまった主人公「人生」くんが、携帯電話の必要ない田舎に行って、いろんな人々に支えられ、助けられ、背中を押されながら、コメ作りを通して自分が生きていることに気付いていくお話です。登場人物が成長する瞬間、気付いていく瞬間が素直に伝わってきます。これから社会に出る皆さんにとって大事なものが見つかるかもしれません。</p> <p>原田マハさんは私の大好きな作家です。どの作品も読みやすく、読めば心が元気になる作品が多いです。心折れても立ち直り、そして再び頑張れる。その力はどこから来るものなのか。それを考えるきっかけと出会えると思います。この「生きるぼくら」もそんな一冊です。</p>		
2	暗幕のゲルニカ	原田マハ著	新潮社
	<p>原田マハさんは私の大好きな作家です。どの作品も読みやすく、読めば心が元気になる作品が多いです。心折れても立ち直り、そして再び頑張れる。その力はどこから来るものなのか。それを考えるきっかけと出会えるはず。この本でも、最後までやりとげようとする強い意思を持った女性が登場します。</p> <p>教科書にも取り上げられる有名なピカソによる絵画「ゲルニカ」。一度は見たことがあるはず。第二次世界大戦直前に描かれたゲルニカは反戦のシンボルとなっています。ゲルニカに込められたピカソの平和への思いとはどんなものだったのでしょうか。この物語は、9.11、そしてその後のイラク空爆前に国連安保理でパウエル長官が会見する時、その場にあった反戦のシンボル「ゲルニカ」に暗幕がかけられて隠されていたという事実から始まります。ピカソの思い、ゲルニカを戦火から救い出した人々の思い、9.11後の世界にその思いをもう一度伝えたいという現代の一人の女性の思いが強く伝わってきます。</p> <p>この本を読むと、ゲルニカを見てみたいときっと思います。また、ワクワクするストーリー展開で、物語に引き込まれていきます。そして、自分も頑張ろうという気持ちが持てるでしょう。</p>		
3	スイート・ホーム	原田マハ著	ポプラ社
	<p>今年、紹介したいと思った本も、原田マハさんの本でした。これは単純に「幸せ」がいっぱい詰まった本です。いつかあなたもパートナーと出会います。その出会いは特別なものと感じるでしょう。それにはきっと理由があります。それは何だと思いませんか？幸せな気持ちは伝染します。気持ちを暖かく応援してくれる人や街や家があり、家族があるからこそ、幸せな出会いがあります。そんなことを感じさせてくれる本です。これからやってくるあなたの特別な出会いを見逃さないために、そして幸せは必ず来ることが信じられるために、一度、読んでみると良い本です。</p> <p>この本はとても読みやすく、読書が苦手な人でも幸せな気持ちになって読み終えることができます。そして、心が温まるおいしいスイーツを誰かと食べたくになります。</p>		
4	キネマの神様	原田マハ著	文藝春秋
	<p>まあ、読んでみて下さい。読み終わったら、きっと、読んでよかったと思いますよ。崖っぷちの父娘の復活物語と思っていたら、人と人とのつながりが奇跡を巻き起こす話です。この本には映画がたくさん出てきます。皆さんは知らない映画も出てきますが、気にせずに読めます。映画は映画館で見たいと思うかもしれません。この本は私のお気に入りです。かなり前に読んだ本ですが、映画化されるということで、推薦することにしました。</p> <p>最後の展開はすごいですよ。奇跡は、人の思いやつながりから生まれます。皆さんにもきっと奇跡はこれからやって来ます。</p>		

5	本日は、お日柄もよく	原田マハ著	徳間書店
<p>スピーチライターを目指す一人の女性の物語。引き込まれて一気に読める本です。そんな中に、言葉の魅力、心をゆさぶるスピーチ、成長していく女性の姿が詰まっています。この本で、相手に心を伝える力とは何かを感じることができました。後半部では、選挙スピーチライターとして奮闘する話から、演説の裏側を知ることにも出来ます。心に響く言葉のつまった一冊、自分の目指す道をまっすぐ進む女性を描いた一冊、読み終えた後、私も頑張ろうと思える一冊、名女大の学生に勧める一冊です。</p>			

吉村智恵子 先生

	書名	著者名	出版者名
先生からのおすすめコメント			
1	天の瞳, 幼年編I	灰谷健次郎著	角川書店
<p>主人公は倫太郎とその仲間たち。 保育園年少組から小学校2年生へと成長していく個性的な彼らの物語です。彼らは自由な発想から、様々なエピソードを引き起こし楽しませてくれます。 一方、彼らを取り巻く大人たち一親、保育者、教師、祖父母、地域の人々等は、時には子どもの真の姿を見失ったり、自分自身の揺らぎを見せたりしながらも、真剣に子どもたちと向き合い続けます。物語の中で交わされる言葉には、人が育つこと、育てること、教えること、学ぶこと、生きることなど、著者からの多くのメッセージが込められています。子どもの自主性や可能性を伸ばそうとする保育園の先生たちの職員会での真剣すぎる姿、常に深い考えに溢れた祖父の言葉と倫太郎からのまっすぐな問いかけは、必ず何かを感じさせてくれます。 倫太郎という感受性豊かな個性を通して、子どもが成長するということ、大人がその成長を見守るということについて考えてみる事ができる1冊です。 この物語は、倫太郎の成長と共に幼年編II、少年編、成長編、あすなろ編へと続きます。著者の逝去により最後は未完となっていますが、まずは幼年編Iを。</p>			

名女大読書プロジェクト

文学部児童教育学科 学科・専攻関連おすすめブックリスト 2024年版

書名よりOPAC詳細結果に移動します。

※絶版のため図書館所蔵なし。

伊藤充子先生

書名	著者名	出版者名
「子守唄」の謎：懐かしい調べに秘められた意味	西館好子著	祥伝社
童謡論の系譜	畑中圭一著	東京書籍

Elmitaheer, Hosam先生

書名	著者名	出版者名
英検準2級でる順パス単	旺文社編	旺文社
英検準2級過去6回全問題集：文部科学省後援		旺文社
英検3級過去6回全問題集：文部科学省後援	旺文社編	旺文社
英検3級でる順パス単	旺文社編	旺文社

小椋郁夫先生

書名	著者名	出版者名
どうぶつのあしがたずかん	加藤由子文；ヒサクニヒコ絵	岩崎書店
ほんとの大きさ動物園	福田豊文写真；柏原晃夫絵；高岡昌江文	学研教育出版
本物の大きさ絵本 原寸大 すいぞく館	さかなクン作；松沢陽士写真	小学館
ほんとのおおきさ水族館	小宮輝之監修；松橋利光写真；柏原晃夫絵；高岡昌江文	学研教育出版
もっと!ほんとのおおきさ動物園	松橋利光写真；柏原晃夫絵；高岡昌江文	学習研究社
本物の大きさ絵本 原寸大 どうぶつ館	前川貴行写真	小学館

勝田拓真先生

書名	著者名	出版者名
勇気づけの心理学	岩井俊憲著	金子書房

子どもの逆境に負けない力「レジリエンス」を育てる本	足立啓美, 鈴木水季著	法研
子どもの心を強くするすごい声かけ	足立啓美著	主婦の友社
幸福論	アラン著 ; 石川湧訳	角川学芸出版
上機嫌の作法	齋藤孝著	KADOKAWA
不機嫌は罪である	齋藤孝著	KADOKAWA
「レジリエンス」の鍛え方：世界のエリートがIQ・学歴よりも重視!	久世浩司著	実業之日本社
実践ポジティブ心理学：幸せのサイエンス	前野隆司著	PHP研究所
伸びる子どもは〇〇がすごい	榎本博明著	日本経済新聞出版社
イラスト図解でわかる!中学校教師の仕事術超入門	曾山和彦編著	明治図書出版
子どもを応援するための特別支援教育	曾山和彦編著	北樹出版

門松愛先生

書名	著者名	出版者名
生きがいについて	神谷美恵子著	みすず書房
おさなごころを科学する：進化する乳幼児観	森口佑介著	新曜社
幼児教育の源流	荘司雅子編	明治図書出版
乳幼児教育における遊び：研究動向と実践への提言	O.N.サラチョ, B.スポデック共編著 ; 白川蓉子, 山根耕平, 北野幸子共訳	培風館
発達がわかれば子どもが見える：0歳から就学までの目からウロコの保育実践	乳幼児保育研究会編著	ぎょうせい
発展途上国の保育と国際協力	浜野隆著, 三輪千明著	東信堂
さむがりやのサンタ	レイモンド・ブリッグズさく・え ; すがはらひろくにやく	福音館書店
どんなにきみがすきだかあててごらん	サム・マクブラットニイぶん ; アニタ・ジェラームえ ; 小川仁央やく	評論社

榎原剛先生

書名	著者名	出版者名
障害と子どもたちの生きるかたち	浜田寿美男著	岩波書店

佐々木基裕先生

書名	著者名	出版者名
教育の職業的意義	本田由紀著	筑摩書房
教養主義の没落	竹内洋著	中央公論新社

柴田悦子先生

書名	著者名	出版者名
ワクワク!ドキドキ!が生まれる環境構成：あしたの保育が楽しくなる実践事例集：3.4.5歳児の主体的・対話的で深い学び	全国幼児教育研究協会編著；岡上直子編著代表	ひかりのくに
保育・子育てQ&A：保護者と保育者がいっしょに考えて解決していくために	全国幼児教育研究協会著；田辺光子編	ひかりのくに
求めあい認めあい支えあう子どもたち：乳幼児期の集団づくり：視点と実践	全国幼年教育研究協議会・集団づくり部会編著	かもがわ出版
これからの時代の保育者養成・実習ガイド：学生・養成校・実習園がともに学ぶ	大豆生田啓友，渋谷行成，鈴木美枝子，田澤里喜編著	中央法規出版
幼児の体験活動に見る「科学の芽」：理数教育へのつながりを考える	森本信也，磯部頼子編著	学校図書

渋谷寿先生

書名	著者名	出版者名
愛するということ	エーリッヒ・フロム著；鈴木晶訳	紀伊國屋書店
フィンランドに学ぶ教育と学力	庄井良信，中嶋博編著	明石書店
私のまわりは美しい：14歳までのシュタイナー教育	松井るり子著	学陽書房
教育の基礎となる一般人間学	ルドルフ・シュタイナー著；新田義之訳	イザラ書房
子どもと楽しむシュタイナー教育の手作りおもちゃ	クリスティーン・ファインズ・クリントン [ほか] 著；寺田隆生訳	学陽書房
脳と創造性：「この私」というクオリアへ	茂木健一郎著	PHPエディターズ・グループ
0歳から7歳までのシュタイナー教育 ※	堀内節子監修・著	学研

杉原央樹先生

書名	著者名	出版者名
勉強するのは何のため?：僕らの「答え」のつくり方	苫野一徳著	日本評論社
教育の歴史と思想	石村華代，軽部勝一郎編著	ミネルヴァ書房

変貌する教育学	矢野智司 [ほか] 編	世織書房
キーワード現代の教育学	田中智志, 今井康雄編	東京大学出版会
教育改革の幻想	荻谷剛彦著	筑摩書房
問い続ける教師：教育の哲学×教師の哲学	多賀一郎, 苫野一徳著	学事出版
学校と社会	デューイ著/宮原誠一訳	岩波書店

高橋哲也先生

書名	著者名	出版者名
ルドルフとイッパイアッテナ	斉藤洋作；杉浦範茂絵	講談社
ルドルフともだちひとりだち	斉藤洋作；杉浦範茂絵	講談社
ルドルフといくねこくるねこ	斉藤洋作；杉浦範茂絵	講談社
ルドルフとスノーホワイト	斉藤洋作；杉浦範茂絵	講談社
大人に質問!「大人ってどのくらい大変なんですか?」	みうらじゅん+児童館の子どもたち著	飛鳥新社
しくじり動物大集合	新宅広二著；インダコウ絵	永岡書店
わたしたちはぜったい負けない：ふたりはプリキュア名言集	講談社編	講談社
絵本 いのちをいただく みいちゃんがお肉になる日	坂本義喜原案；内田美智子作；魚戸おさむとゆかいななかまたち絵	講談社

坪井眞里子先生

書名	著者名	出版者名
イラストでみる合唱指導法：授業に生かせる指導マニュアル110	竹内秀男著	教育出版
さくら・さくらんぼのリズムとうた：ヒトの子を人間に育てる保育の実践, 改訂版	斎藤公子著	群羊社
ハーバード大学は、「音楽」で人を育てる	菅野恵理子著	アルテスパブリッシング
クラシック作曲家大全：より深く楽しむために	松村哲哉翻訳	日東書院本社

出木良輔先生

書名	著者名	出版者名
コンビニ人間	村田沙耶香著	文藝春秋
せんせい。	重松清著	新潮社
兔の眼	灰谷健次郎著	角川書店
リボンの騎士 1	手塚治虫著	講談社
リボンの騎士 2	手塚治虫著	講談社
丸の内魔法少女ミラクリーナ	村田沙耶香著	KADOKAWA
地球星人	村田沙耶香著	新潮社
イグアナの娘	萩尾望都著	小学館
トーマの心臓	萩尾望都著	小学館
田舎教師	田山花袋著	新潮社
二木先生	夏木志朋著	ポプラ社
魯肉飯のさえずり	温又柔著	中央公論新社

羽澄直子先生

書名	著者名	出版者名
シネマのなかの臨床心理学	山中康裕, 橋本やよい, 高月玲子編	有斐閣
シネマで読むアメリカの歴史と宗教	栗林輝夫, 大宮有博, 長石美和共著	キリスト新聞社
食べるアメリカ人	加藤裕子著	大修館書店
シネマ女性学	松本侑壬子著	論創社
映画でみる精神分析	小此木啓吾著	彩樹社
昔話の深層	河合隼雄著	福音館書店
お月さん、とんでるね一点頭てんかんの娘と共に生きて—	夏野いづみ著	銀の鈴社
フェミニズムの彼方：女性表現の深層	水田宗子著	講談社
Because I am a Girl~わたしは女の子だから	ティム・ブッチャー [ほか] 著；角田光代訳	英治出版

ちいさな大きなたからもの：特別養子縁組からはじまる家族のカタチ	瀬奈じゅん, 千田真司著	方丈社
国際共通語としての英語	鳥飼玖美子著	講談社

服部幹雄先生

書名	著者名	出版者名
日本語と外国語	鈴木孝夫著	岩波書店
実践 日本人の英語	マーク・ピーターセン著	岩波書店
小学校英語のジレンマ	寺沢拓敬著	岩波書店
英語独習法	今井むつみ著	岩波書店
教養としての言語学	鈴木孝夫著	岩波書店
日本人はなぜ英語ができないか	鈴木孝夫著	岩波書店
外国語学習の科学	白井恭弘著	岩波書店
ことばと思考	今井むつみ著	岩波書店
日本の感性が世界を変える	鈴木孝夫著	新潮社
英語上達12のポイント	門田修平著	コスモピア
「日本人と英語」の社会学	寺沢拓敬著	研究社
英文法再入門：10のハードルの飛び越え方	澤井康佑著	中央公論新社
「自分カメラ」の日本語「観客カメラ」の英語：英文法のコアをつかむ	熊谷高幸著	新曜社
英文法の疑問	大津由紀雄著	日本放送出版協会
言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学	西村義樹, 野矢茂樹著	中央公論新社
日本語で外国人と話す技術	高嶋幸太著	くろしお出版
言語の社会心理学	岡本真一郎著	中央公論新社
国際共通語としての英語	鳥飼玖美子著	講談社

堀祥子先生

書名	著者名	出版者名
みえるとかみえないとか	ヨシタケシンスケさく；伊藤亜紗そうだん	アリス館
目の見えない人は世界をどう見ているのか	伊藤亜紗著	光文社

堀部要子先生

書名	著者名	出版者名
LD(学習障害)の子どもたち：障害を知る本 子どものためのバリアフリーブック8	上野一彦編；稲沢潤子文；オノビン, 田村孝絵	大月書店
読む・書く・記憶するのが困難なLDの子どもたち。：怠けてなんかない!：ディスレクシア	品川裕香著	岩崎書店
会話のできない中学生がつづる内なる心：自閉症の僕が跳びはねる理由	-	エスコアール出版部
会話のできない高校生がたどる心の軌跡：自閉症の僕が跳びはねる理由 続	-	エスコアール出版部
へんしんトンネル	あきやまただし作・絵	金の星社
窓ぎわのトットちゃん	黒柳徹子著	講談社
きみのことがだいすき	いぬいさえこさく・え	パイインターナショナル

梶川知先生

書名	著者名	出版者名
日本語練習帳	大野晋著	岩波書店
江戸の教育力	大石学著；東京学芸大学出版会編集委員会編	東京学芸大学出版会
日本人の叡智	磯田道史著	新潮社
早朝坐禅：凜とした生活のすすめ	山折哲雄著	祥伝社
格差と序列の日本史	山本博文著	新潮社
教師の資質	諸富祥彦著	朝日新聞出版
子どもが育つ江戸しぐさ	越川禮子著	KKロングセラーズ
いい子に育てると犯罪者になります	岡本茂樹著	新潮社
江戸の躰と子育て	中江克己著	祥伝社
和の思想：異質のものを共存させる力	長谷川耀著	中央公論新社

「教育七五三」の現場から	瀧井宏臣著	祥伝社
日本を教育した人々	齋藤孝著	筑摩書房
日本の教師に伝えたいこと	大村はま著	筑摩書房
日本語通	山口謠司著	新潮社
日本文化のキーワード：七つのやまと言葉	栗田勇著	祥伝社
漢字に託した「日本の心」	笹原宏之著	NHK出版

村田あゆみ先生

書名	著者名	出版者名
子どもと本	松岡享子著	岩波書店
えほん・絵本・134冊：子どもと大人をつなぐ。	増田喜昭著；新田新一郎責任編集	学研教育みらい
絵本は心のへその緒：赤ちゃんに語りかけるということ	松居直著	ブックスタート
絵本の本	中村柊子著	福音館書店
読む力は生きる力	脇明子著	岩波書店
つなみ：被災地の子どもたちの作文集：完全版	森健編	文藝春秋
子どもはみんな問題児。	中川李枝子著	新潮社
ちいさい言語学者の冒険：子どもに学ぶことばの秘密	広瀬友紀著	岩波書店
メディアにおしばまれる子どもたち：小児科医からのメッセージ	田澤雄作著	教文館
かんがえる子ども	安野光雅著	福音館書店
子どもに語るアンデルセンのお話	アンデルセン著；松岡享子編	こぐま社
子どもに語る グリムの昔話①	グリム著；佐々梨代子，野村 洵訳	こぐま社
子どもに語る 日本の昔話①	稲田和子，筒井悦子著	こぐま社
未来のだるまちゃんへ	かこさとし著	文藝春秋
1ねん1くみ1ばんワル	後藤竜二作；長谷川知子絵	ポプラ社
ライオンと魔女（ナルニア国物語Ⅰ）	C.S.ルイス作；瀬田貞二訳	岩波書店

山田勝先生

書名	著者名	出版者名
カウンセリングを語る 上	河合隼雄著	創元社
カウンセリングを語る 下	河合隼雄著	創元社
大人になることのおずかしさ	河合隼雄著	岩波書店
昔話と日本人の心	河合隼雄著	岩波書店
昔話の深層 ユング心理学とグリム童話	河合隼雄著	福音館書店
子どもの宇宙	河合隼雄著	岩波書店
子どもの本を読む	河合隼雄著	岩波書店
子どもと悪	河合隼雄著	岩波書店

山本忠先生

書名	著者名	出版者名
子どもは数をどのように理解しているのか：数えることから分数まで	吉田甫著	新曜社
算数教育指導用語辞典(第5版)	日本数学教育学会編著	教育出版
認知心理学からみた数の理解	吉田甫, 多鹿秀継編著	北大路書房
絵と図でわかるデータサイエンス：難しい数式なしに考え方の基礎が学べる	上藤一郎著	技術評論社
あそんで学ぶ数・形(幼稚園・保育園の学びシリーズ)	グループこんぺいと編著	黎明書房
零の発見—数学の生い立ち (改版)	吉田洋一著	岩波書店
算数学び合い授業ステップアップブック：「取り上げ・つなぎ・問い返す」でうまくいく!	宮本博規著	明治図書出版
算数の本質に迫る「アクティブ・ラーニング」	新算数教育研究会編著	東洋館出版社
言語力を育てる!算数教科書の定義・定理〈性質〉事典：教えることと考えさせることを区別する	志水廣著	明治図書出版
親子で楽しむ和算の図鑑	谷津綱一著	技術評論社
すごいぞ折り紙：折り紙の発想で幾何を楽しむ	阿部恒著	日本評論社

吉川直志先生

書名	著者名	出版者名
女性と学問と生活	坂東昌子, 野口美智子, 新山陽子編	勁草書房
わすれられないおくりもの	スーザン・バーレイさく・え	評論社
理系の女の生き方ガイド—女性研究者に学ぶ自己実現法	宇野賀津子, 坂東昌子著	講談社
センス・オブ・ワンダー	レイチェル・カーソン著; 上遠恵子訳; 森本二郎写真	新潮社
もうダメされないための「科学」講義	菊池誠 [ほか] 編	光文社
生物と無生物のあいだ	福岡伸一著	講談社

吉村智恵子先生

書名	著者名	出版者名
育ての心 上	倉橋惣三著	フレーベル館
育ての心 下	倉橋惣三著	フレーベル館
忍者にであった子どもたち：遊びの中間形態論	加用文男著	ミネルヴァ書房
子どもたちの100の言葉：レッジョ・エミリアの幼児教育実践記録	レッジョ・チルドレン著; ワタリウム美術館編; 田辺敬子 [ほか] 訳	日東書院本社
子育て：錦を織るしごと	斎藤公子著	斎藤公子記念館
保育者の地平：私的体験から普遍に向けて	津守真著	ミネルヴァ書房
幼児教育へのいざない	佐伯胖著	東京大学出版会
遊びを中心とした保育：保育記録から読み解く「援助」と「展開」	河邊貴子著	萌文書林
遊び保育論	小川博久著	萌文書林
子どもの心の育ちをエピソードで描く	鯨岡峻著	ミネルヴァ書房
子どもの自然誌	矢野喜夫, 矢野のり子著	ミネルヴァ書房